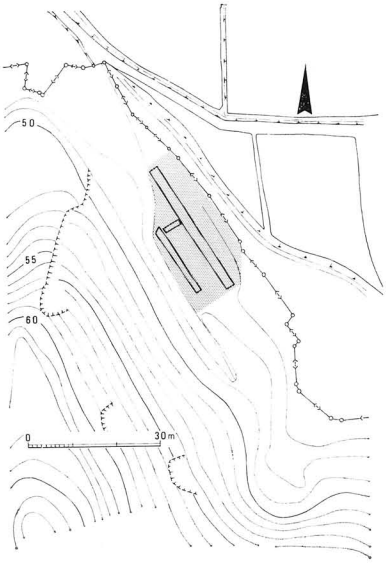
第2図　第21・22・23号地点付近地形図

Ⅱ　調査地点の概要

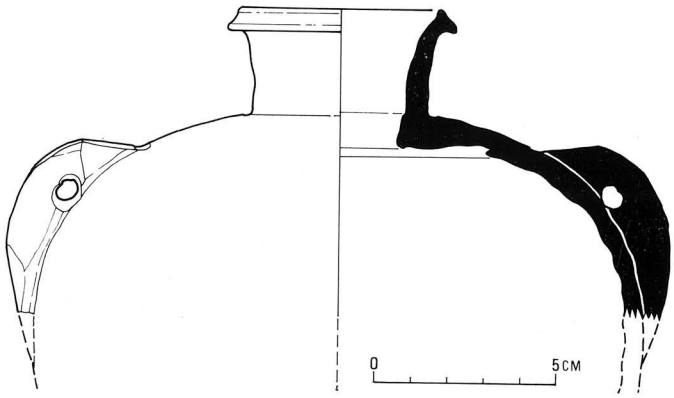
Ⅱ-1　第21号地点の調査

第21号地点は奈良市歌姫町436・437・438・439・452・453・454・455・456・457番地にわたる山林である。調査は約3m間隔に試掘坑を設定し、遺構があればそれを拡張して遺跡の範囲を確認するという方針でおこなった。瓦片や土器片が含まれていたり、木炭を含んだ層が広がりを見せている部分もあったが、試掘坑を拡張した結果では、確かな遺構は検出できなかった。

第3図　第21号地点遠景　　西から



第4図　第22号地点地形図



第5図　第24号地点出土土器

Ⅱ－2　第22号地点の調査

第22号地点は奈良市歌姫町1837番地に属する丘陵北面につくられた畑地である。調査地の中央部に幅約２ｍ、長さ32ｍの東西トレンチ、および幅１ｍ、長さ17ｍの東西トレンチを設定した。丘陵傾斜地を整地して畑地にしてあったため、地表面から地山までの深さは一定でない。南トレンチでは約40㎝、北トレンチでは約80㎝の深さで地山に達する。この地山上の堆積土には古墳時代の土師器片を含んでいるが、明確な遺構は検出できなかった。

Ⅱ－3　第23号地点の調査

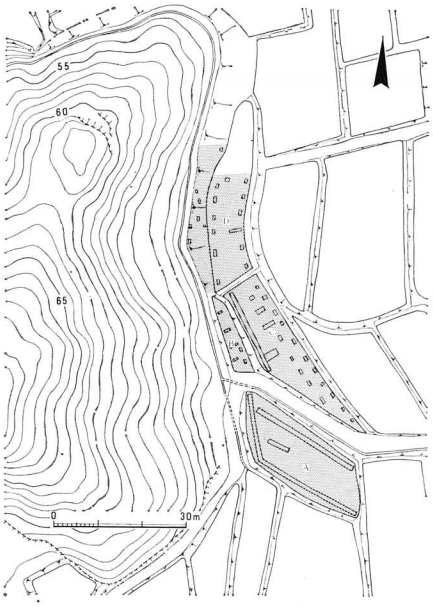
第23号地点は、奈良市歌姫町 335-4 番地の山林で、昭和48月10月29日から同月31日まで調査を行った。当地でも試掘坑による遺構確認調査を行ったが、遺構・遺物ともに全く検出されなかった。

Ⅱ－4　第24号地点の遺物

造成事業の行なわれた地域で、須恵器杯の口縁部２点と灰釉陶器双耳壺１点を採集した。須恵器杯は、破片が小さすぎるため、詳細は不明である。灰釉陶器双耳壺は、丸く張った肩部に一対の耳の付くものである。耳はヘラで面取りし、１ケ所に円孔を穿っている。内面は全体に赤紫色を呈し、外面には全面に茶褐色の灰釉が施されている。

遺物採集後、数回にわたって現地踏査を行ったが、他に遺物はなく、遺跡の性格は不明である。

Ⅱ-5　第9号地点―音如谷瓦窯―の調査



第6図

1　遺　跡

調査地は、音如谷瓦窯に接する水田地帯で、西側の丘陵頂部には音乗谷古墳、谷一つ隔った南方の丘陵には6基からなる歌姫西瓦窯がある。水田一筆毎に南からA・B・C・Dの4区に分け、A区ではトレンチ、B・C・D区では試掘坑によって調査を行った。B・D区では少量の土器類や瓦類を得たのみで遺構は検出されなかった。C区では丘陵に沿った幅約50㎝の素掘りの溝を1条検出したが、遺構の性格は不明である。A区では、幅1mのトレンチを4本、延べ68m設定したなかで、灰原3ケ所、柱穴19ケ所、溝2条を検出した。灰原には、灰に混って木炭や窯壁の破片が含まれており、ここから多量の瓦類を得た。柱穴はいづれも一辺20～40㎝程度の円形に近い小規模のもので、4ケ所に直径8㎝程の柱根が残っていた。

なお、A-3 トレンチの灰原の下層で土壙を1ケ所検出した。灰を殆んど含まない砂質土が堆積しており、ここから多量の土器類とともに少量の瓦類を得た。

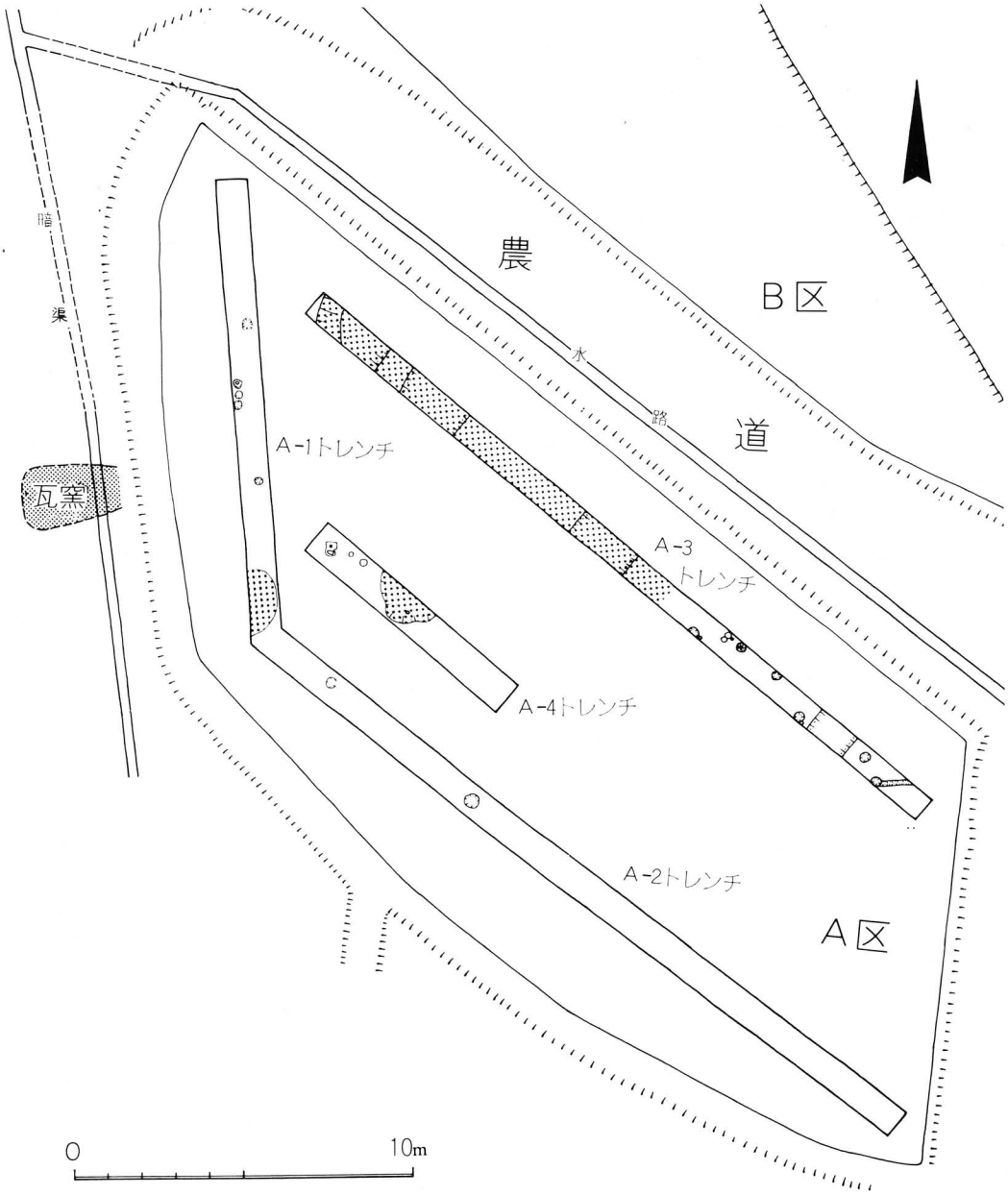
A区では遺構面が西側の丘陵の傾斜と比してほぼ水平に近く、瓦生産を始めるにあたって何らかの造成を行っていることが知られる。柱穴は工房など生産に関係する施設と考えられるが、トレンチ発掘によるため建物規模・棟数等詳細は不明であり、後日の本調査にまちたい。

なお、本年度調査地域外であるが、A区西側の水路で瓦窯1基の存在を確認した。水路が暗渠から開渠に移る部分で、水路の底を清掃した際に検出したものである。水路内にかかった部分だけしか確認できなかったが、窯体の幅約1.6mで、東に焚口部がつくものであろう。当地ではかつて音如谷瓦窯として瓦窯1基が調査されており、今その位置を明らかにし得ないが、調査記録によれば、あるいは現在の暗渠部分にあったものとも推測される。もしそうだとすれば、瓦窯が2基あることになる。いずれにせよ、複数群在することの多い瓦窯のことであり他にも存在する可能性は強い。

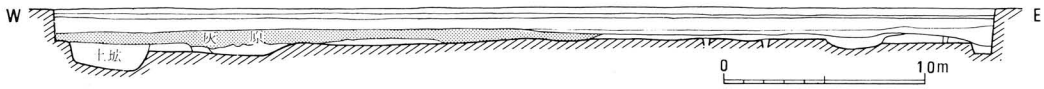
2　遺　物

瓦類　瓦類には、多量の丸・平瓦と若干の軒瓦がある。丸・平瓦は現在なお整理作業を続行しているので、軒瓦について述べる。

軒丸瓦は2型式4個体、軒平瓦は7型式19個体あり、他に型式を識別し得ない小片が軒丸瓦に2個体、軒平瓦に1個体ある。



第7図 第9号地点A区遺跡図



第8図 A-3トレンチ北壁土層図

1は単弁12弁軒丸瓦である。外区には外縁に線鋸歯文を、内縁に珠文をめぐらせる。内区は外区内縁よりわずかに突出しているが、弁区は平坦である。中房に1＋5と配した蓮子は高く突出している。胎土にはかなり砂粒を含む。類例は平城宮跡、法華寺阿弥陀浄土院に見られる。2は内区に界線でかこんだ複弁8弁蓮華文を配し、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文をめぐらせる。内区は突出するが中房を低く作っているため、蓮弁は反転が強く表現されている。瓦当面には笵型の木目が明瞭に認められる。胎土には砂粒を多く含んでいる。類例は平城宮跡、東大寺、唐招提寺、法華寺阿弥陀浄土院に見られる。

3～6は均整唐草文軒平瓦である。いずれも外区に珠文をめぐらせる。顎はすべて曲線顎である。4は他遺跡の資料から瓦当上弦幅約22cmに復原でき、小型の軒平瓦である。外区に長円形の珠文をめぐらせるのが特徴的であるが、唐草文様は6と同じ系統に属するものである。類例は大安寺、法華寺阿弥陀浄土院に見られるが、後者は同笵品である。3・5・6も法華寺阿弥陀浄土院の発掘調査において同笵品が出土している。これらの軒平瓦には全般的に胎土に砂粒や小石を含むものが多い。

これらの他に刻印瓦が1点出土している。約1.5cm四方の刻印を平瓦凹面に捺したものである。「川」と読むこともできるが、ここでは「三」としておく。

以上、出土軒瓦の概要を述べた。今回の調査は予備調査であり、窯体の発掘調査ではないが、法華寺阿弥陀浄土院の造営に関連する瓦窯であることを確認した意義は大きい。

土器類　灰原下層土壙から多量の土師器と少量の須恵器を得た。土器類はいずれも小片で、土師器では器面が荒れており、全体として遺存状況は良くない。しかしこれらの土器類は一括資料としての性格をもつため、簡単に紹介しておきたい。

土師器　土師器には杯A・杯B・皿A・蓋・鉢A・盤A・片口・高杯・鍋・薬壺・甕がある。このうち杯・皿類が大部分を占める。杯A（1～4）には、口縁部が内側に巻き込むものと、口縁端が外へ張り出すものとがある。調整手法にはa・b2手法があり、口縁部外面を篦磨きするものが多い。器面が荒れているため暗文の有無・形態は明確ではないが、内面の底部に螺旋暗

第9図　第9号地点遠景　　東から

文、口縁部に放射暗文を施すものが多い。さらに連弧暗文を施すものもある。杯Bは小片のため詳細は不明である。

皿A（6～8）には、口縁端を内側に折り曲げたものと外反するものがある。a手法によって調整し、放射暗文をもつものがある。

蓋（5）は、円形の偏平なつまみのつくもので、頂部外面を丁寧に篦磨きし、内面には螺旋暗文を施している。

高杯（10）は、浅い杯部に短い脚部のつくものである。杯部内面には螺旋暗文と放射暗文を施し、杯部外面・裾部外面には篦磨きを行なう。脚部内面は篦削りで調整する。

鉢A　（12）は、口縁部外面に篦磨きを行ない、内面には渦状暗文を施している。

盤A　（13）は、一対の把手の付くもので、口縁部外面には粗い篦磨きを行っている。

片口　（9）は、小形のもので、外面を篦削りによって調整する。

鍋　（11）は、丸い体部と外反する口縁部からなり、体部の底部近くに三角状の薄い把手一対がつく。

薬壺は、体部に一対の把手がつくものであるが、器面が殆んど剝落しており、原形をとどめない。

甕には、把手のつくものとつかないものがある。いずれも外面は刷毛調整を行っている。他に直径20cmのドーナツ形をした土製品があるが、破片でもあり、原形・用途いずれも不明である。

須恵器　須恵器には、杯A・杯B・皿B・杯B蓋・皿B蓋・盤A・鉢A・瓶・双耳壺・甕がある。杯A（1・2）はいずれも篦切りの後になでて底部外面を調整している。口縁部の形態では、1の端部内側がわずかに凹むのに対し、2では口縁部が外反する。

杯B（3・4）には、篦切りのままで底部外面を調整しないもの（4）と、篦で削って仕上げるもの（3）とがある。

皿B（7）では、底部外面を篦削りで仕上げている。杯B蓋（5）、皿B蓋（6）はともに偏平な宝珠つまみのつくものである。

鉢A（8）は、口縁部の破片であるが、平底ないしはそれに近い底部をもつものであろう。

瓶（10）は、偏平な体部に外反する長い口頸部のつくもので、縁端部は丸い。高台は内端部が突出する。

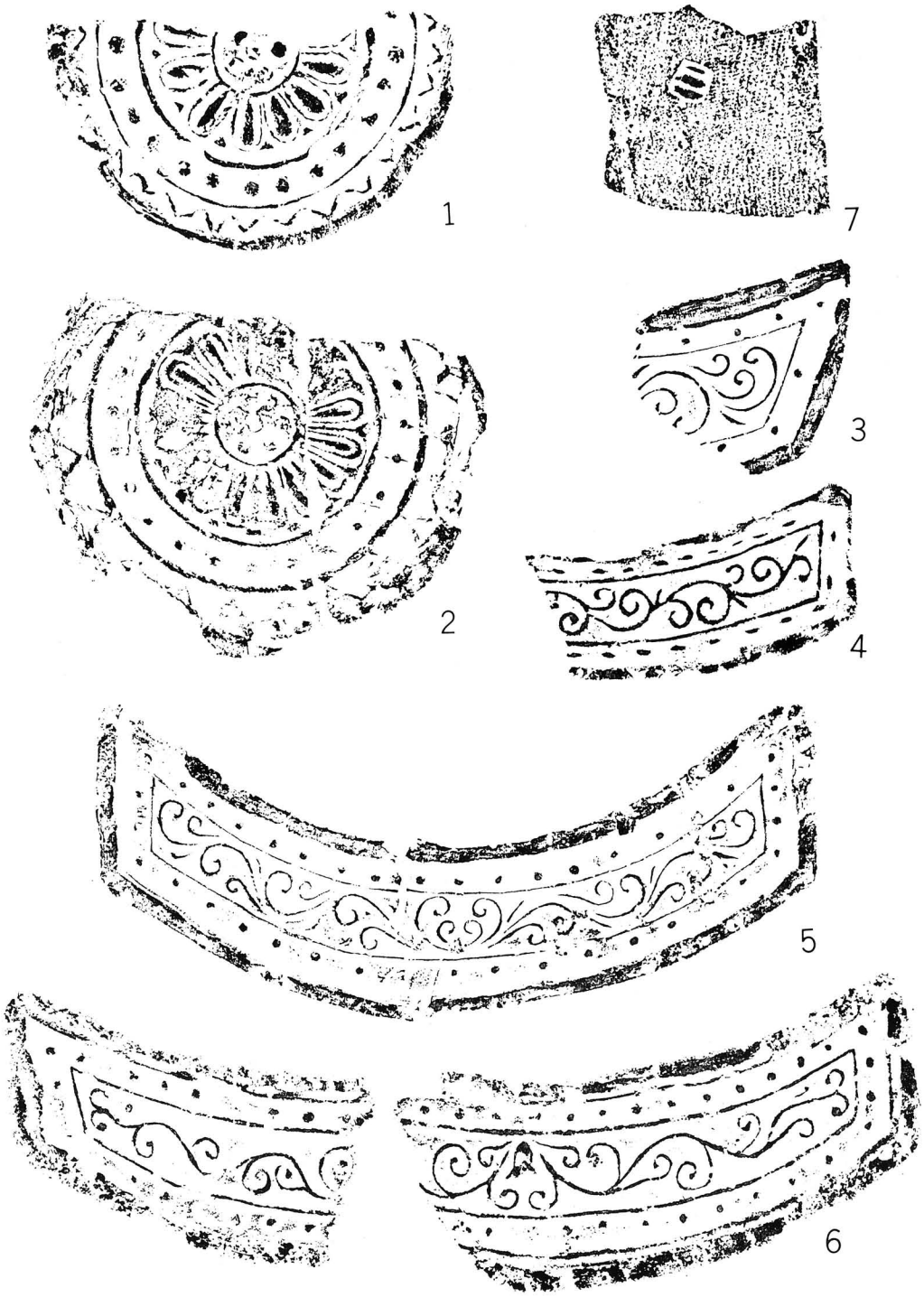
双耳壺（11）は、肩部に一対と体部下半に1つの合計3耳の付くものである。肩部以下の体部外面を篦削りする。耳は一孔をもち、篦削りで成形した後になでて仕上げている。甕は小片のため原形不明である。

以上、簡単に説明を加えたが、これらの土器群は平城宮跡出土土器と相似た様相を呈しており、その年代としては、天平末年を少し遡る時期を与えることができる。

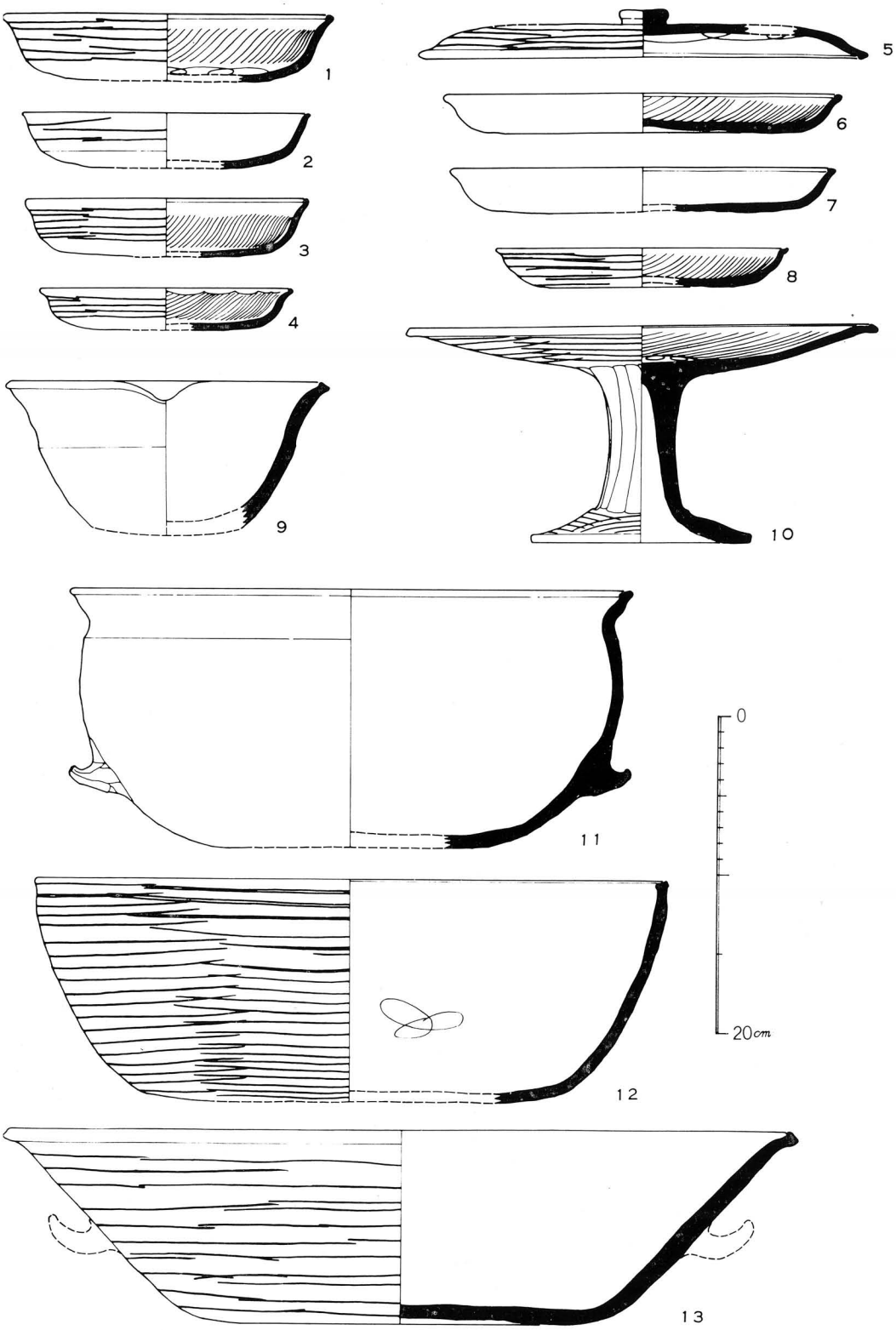
第10図 第 4 号 地 点 遠 景　　西 か ら

Ⅱ-6　第4号地点の調査

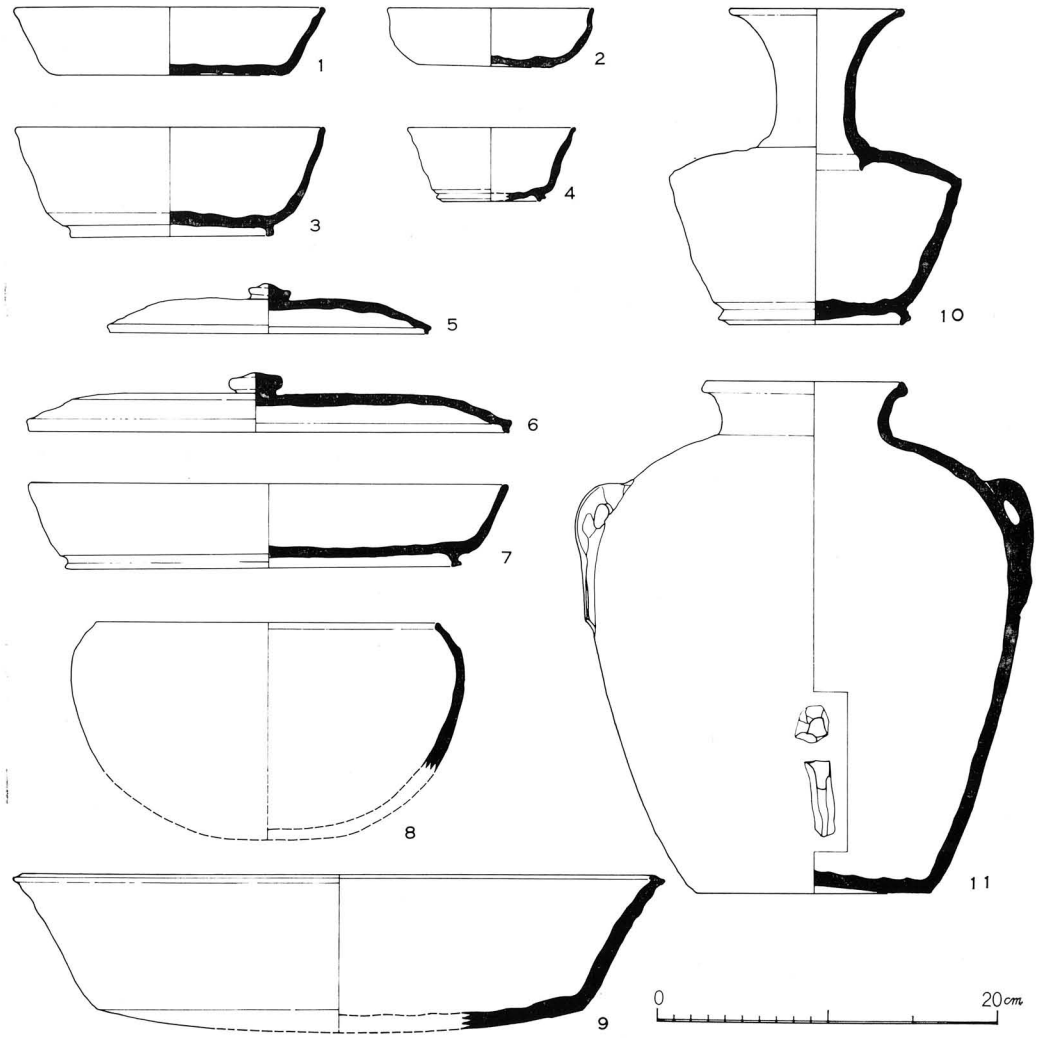
調査地は九頭尾神社境内にあり、社殿西側の丘陵頂部である。丘陵東側が崖になっているため、西側にトレンチを設定した。トレンチは幅1m、長さ各8m、10m、12mである。頂部では約20cm、傾斜部では約70cmで地山に達したが、土器・埴輪等の遺物や、盛土・葺石等の墳丘施設はまったく検出されなかった。



第11図　第 9 号 地 点 出 土 軒 瓦



第12図 第 9 号 地 点 出 土 土 師 器



第13図 第 9 号 地 点 出 土 須 恵 器